
七人の小人少女

殿雌カシコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七人の小人少女

【Nコード】

N8913D

【作者名】

殿雌カシコ

【あらすじ】

バイトも終わり、くたくたになりながらも家路についた俺を待っていたのは、何とも有り得ない光景であった…。七人の小人達が引き起こす、はちゃめちゃラブコメディ！ここに開幕！…の予定

序幕 家を壊すのならば柱を狙え（前書き）

小説初投稿です。一話一話がいちいち短いですが、投げ出さず温かい目で見てください（――）<

序幕 家を壊すのならず柱を狙え

「なぜだ…」

バイトも終わり、くたくたになりながらも家路についた俺を待っていたのは、何とも有り得ない光景であった。

「みんなー！後一息だ！気合い入れていくぞ！」

「おー！」

そこにいたのは七人の少女たち。彼女たちは、身の丈ほどもある巨大なハンマーを振り回し

「せーの…どっせい！」

俺の家を破壊していた…。

何これ？新手的リフォーム詐欺？状況が全く掴めないんですけど？

そんな俺の混乱などお構いなしに、少女たちは黙々とその破壊活動が続けていた。ひとりは屋根を壊し、ひとりは壁を粉碎し、ひとりは柱を狙い打って、そして…

「崩れるぞ！」

どどどどどどど！

そんな大きな爆音と共に我が家は崩壊した。

それと同時に爆風が粉塵を伴って俺に襲いかかる。

「ぐわっ！」

俺は吹き飛ばされ、電柱に頭をぶつけた。

視界が一瞬で真っ白となり、少しずつ意識は遠のいていく。

薄れゆく意識の中、俺がみたのは跡形もなく崩れ去り瓦礫の山と化した俺の家と、何ともやり遂げた顔をした七人の少女たちの笑顔だった。

第一幕 ゴミはゴミ箱に。では人は？

目が覚めると辺りはすでにぼんやりと明るく、俺はえらく長い間、
気を失っていたのだということをこの時理解した。

しかし、わからないことが一つ…俺は一体全体、どうしてこんな所
にいるのだろうか？

「なぜだ…？」

気がつけば俺は、ゴミ捨て場に棄てられていた。

しかもご丁寧にゴミ袋に入れられて、今は頭だけ出ている状態であ
る。これは優しさなのだろうか？この寒空の下、せめてゴミ袋だけ
でもまとして寒さを凌いでねと。

嬉しいじゃないの、人間まだまだ捨てたもんじゃないねっ…て、ん
なわけあるかー！だいたい捨てられてるの俺やがなー！

などと、そんな極寒の一人ノリつつこみを経て、俺は我に返った。

「…そうだ、俺の家…！」

そして思い出す。あの悪夢のような光景を。七人の少女がハンマー
を手に俺の家をフルボッコ。俺が見たあの光景が夢でないのなら今
俺の家は…

俺はいてもたってもいられなくなり、袋姿のまま、尺取り虫のよう
に這いずると我が家があるはずの方角を目指した。

：

:

それから数分後…

「何じゃこりゃあ…」

やっとの思いで戻ってきた俺はその光景に愕然とした。

結果から言えば、あれは夢でも何でもなく、まごうことなき現実であり、昨日までそこにあつた我が家はまるで初めから無かつたかのようにその場から姿を消していた。

しかしまあ、それは、実際その様子を目の当たりにしたわけだから覚悟はしていたことで…いや、すごいショックなだけけど、まだ平静を保っていられると思つていたのだ。

しかし俺はこの様に

「開いた口がふさがらない」という言葉を見事に体で表現している状態で…つまり何が言いたいのかと言えば

「豊臣秀吉の一夜城かつ！」俺の家があつたはずの跡地にはすでに家が建てられていた。

第二幕 一夜城は実は一夜ではつくられていない

俺は我が目を疑った。

昨日まで確かにそこにあった俺の家が、まったく別の家に取って代わっていたのだ。

しかも俺が気を失っていた半日も経っていない間に。天下の一夜城でさえ一夜では建たなかったというのに…

俺はまだ夢の中にいるのではないかと頬をつねった。

「いへーよ」

やっぱり痛かった…。

俺はへたりとその場に座り込むと、茫然とその家を見上げた。

短時間で造ったにしては立派な家だ。扉も窓もちゃんとついていて奥行きもある。どうやら張りぼてではなさそうだ。

しかも無駄に二階建てで、全体的に丸みを帯びたその形はキノコのよう。というかキノコをモチーフにして造られたのかもしれない。

屋根赤いし。

まるでおとぎ話にでも出てくるようなそんな家だった。

「シルバニアファミリーかつーの…」

正直この町にはまったくの不釣り合いで、ハンパなく痛々しいその家を眺めて…俺はふと考えた。

これってやっぱりご近所からみたら、俺がリフォームしたように思われるのかしら？

「あら奥さん。見た？あのお家、プーくすくす」

「見た見た。趣味疑っちゃうわよねー、プーくすくす」

そんなご近所での会話が脳内で流れ出す。

「…は、」

恥ずかしすぎるううう！俺何にも悪くないのに社会から爪弾きにされるう！

もはや家を壊されたことよりもショッキングなこの事実には俺は動転した。何とかしなければ！

俺は素早く立ち上がるとその家の玄関へと走り寄った。よく見れば扉の横にはいっちょ前にインターホンなんかがついていて……てかこれ俺んちのインターホンじゃねえか！！

俺はもろもろの怒りを己の指にこめてそのインターホンをプッシュした。

第三幕 人生わからないから面白いとよく言うが、それは成功者だから言える二

ピンポン。

締まりのない電子音が鳴る。その音を聞き、俺はこのインターホンが間違いなく俺の家のものであることを確信した。何故わかったのかと言えば、うちのそれは普通のものより無駄に高音であり、音程も若干おかしいからであるのだが。まあ、今はどうでもいいことだ。置いておこう。

しかしまさかこんな形で、自分の家のインターホンを鳴らすときが来るとは思いもしなかった。人生何がおきるかわからないというが、俺のこの体験は世界屈指のものではないだろうか？

家を壊され、気を失い、気付けばゴミ捨て場に捨てられて、戻ってみれば別の家が建っていた。…なんてとんでも人生、誰が予想できる？わからない範疇を越えてるだろ。うん。

…。

……。

………。

てか遅いよ！ちゃきちゃき出てこいよ！こらあ！

苛々が頂点に達した俺がもう一度インターホンを押そうとした、その時だった。

「あはは、誰？」

何とも間の抜けた声がインターホン越しから聞こえてきた。

きつとあの時いた少女たちの一人に違いないとふんだ俺は怒りにまかせて怒鳴り散らした。

「あのー！？この場所に住んでいた者なんですけどもー！？」

何故か敬語で…

「ここ元々俺の家があつた場所なんですが！？あなた達は何の権限があつて俺の家をぶつ壊して、この場所にこんな家をお建てになつたんでしょーかー！？」

言葉づかいはアレだがこれでも俺は怒り心頭で、今までの人生の中で一番荒々しい一面を見せていたと思う…キノコハウスの前というのが非常に残念であるが。

返答によつてはそのまま突入して文句を言つてやろうと思つていた程だ。

しかしそんな俺の決意は虚しく肩すかしを食らうことになる。

「あははゝ、合い言葉はゝ？」

インターホンからは返ってきたのはそんな俺の予想の斜め上をいく返答だった。

流石の俺もこれにはキレた。

「アリババか！」

キレてる俺のツッコミにキレがないのはこれ如何に…

あれ？今俺うまいこといった？

てか合い言葉ってなんね？

第四幕 冤罪はなかなか拭えない

前回までのあらすじ

突然の合い言葉要求にまさかの

「アリババか！」ツツコミ。そして俺はうまいことを言う。

「ありばば？あはは、違うよ。合い言葉が違うよ」

どうやら俺のツツコミを合い言葉だと勘違いしたらしい。

いや、そりゃ違うでしょうよ。これが合い言葉だったら俺だって笑うわ。

「あと10回間違えたらアウトだよ」

「……………」

まだそんなにチャンスあんのかよ……などと心の中でツツコミをいれつつ、さすがにこれ以上は付き合いきれないと、俺は一時的に怒り鎮め、大人の対応でこの状況の打開を図ることとした。

「悪いけど、今はそんな遊びにつき合っている暇はないんだ。ここを開けてくれないか？」

「駄目だよ。合い言葉を言わないと入れてあげないよ」

あくまでも合い言葉にこだわる少女。ふふ、では仕方がない。大人の対応と言うものを見せてやろう！

「開けてくれたらお菓子あげるから、ね？いい子だから開けてよ。」大人の対応。それ即ち買収なり。これぞ大人のやり方よ！さあ、わっぱ！この誘惑に耐えられるかな！？

俺は勝利を確信して、相手の言葉を待った。しかし彼女の口から出た言葉はまたしても俺の予想を大きく裏切るものだった。

「知らない人からモノを貰っちゃいけないっていわれてるから駄目だよ」

ええええええ！？

人の家壊しといて何でそんなとこだけ常識的なのさ！？てか今俺完全の不審者扱いされてる！？

「じゃあ私、色々忙しいから」

「ちよつと待って！何その余所余所しい態度！さっきまであんなに馴れ馴れしかったのに！？俺は別に怪しいものじゃ…！」

ブツンッ

俺の弁解を最後まで聞くことなく、その通信は途絶えた。

「…何故だ」

俺はその時本当に泣きたくなった…。

土地を奪われた挙げ句の果てが変質者扱いなんてあんまりだ。理不尽すぎる…。

「っはああ…！」

俺は扉に背を向けると、まだ登り切っていない太陽を見上げ、大きくため息をついた。

「はあ、もうどうでも良くなってきたな…」

リストラされた中年サラリーマンのようなことを呟く俺。そんな俺の発言は、すでに負け組入り決定なんじゃないかなー、なんてどうでもいいことを俺に考えさせて、尚更俺を鬱にさせた。

「はあ…」

もはや俺はため息の大売り出し状態である。

そんな今の俺には、周りを気にする余裕もなく

「おい、誰だお前？」

その少女の接近にまったく気がつかなかったとしてもおかしくないだろうと思うわけで…。

「そんな所に立ってたら私が家に入れん。さっさと去ね、しっしっ
」

…とりあえずこの子を殴っていいのかな？

第五幕 「キモい」より「気持ち悪い」の方が男としては傷つきます

「ほら、散った散った！夜中の作業で疲れてるんだ、私は」

俺が呆氣にとられていいるのをいいことに、さつさとキノコハウスに入ろうとする少女。いやいや、ちよいとお待ちよお嬢さん。

「ちよ、待てて…！」

登場そこそこに退散しようとする彼女を、俺は彼女の腕をとって引き留めた。

「何だ？」

そんな俺をギロリと睨む少女。別に睨まんでもいいでしょうに…マジ怖いんですけど。

彼女の視線に少し怯みながらも、俺はそこで初めて彼女の姿をきちんと確認する事ができた。

その少し低めの声や独特の喋りとは裏腹に、彼女は非常に小柄な少女であった。その身長は俺の腰ほどの高さしかなく、それから考えれば彼女の身長は120センチもないだろうと思われる。

そんな彼女の装いは赤色のチュニツクに黒のパンツルックで、足にはやけに先のとんがったブーツを履き、頭にはヘンテコな布製の帽子を被っている。

ファッションに特別詳しい訳ではないが、全体的に奇妙な出で立ちをしているように思う。主にその帽子とか、帽子とか…。

まあしかした。ここまでならただの奇抜でおしゃまな小学生ですむ話で、まだ常識の範囲内だと言えるかもしれない。

しかし、そのヘンテコ帽子からのびるように生えた真つ赤な長い髪と、それに合わせるように光る真つ赤な目。さらにその髪の間から覗く、彼女のやけにとんがった耳がこの少女が常識の範囲などとうに超越した、ただ者ではない人物だということを俺に示していた。

てか本当に何なのこの子…髪は染めてるとしてその目は何よ？カラ
ーコンタクト？これが俗に言うコスプレって奴なのだろうか？それ
にしても気合いは入り過ぎだろ。

そんな恐るべき日本のオタク文化に若干引き…気圧されていた俺だ
ったが

「…何を見ている、気色悪い」

そんな彼女の胸をえぐるような言葉により我に返った。

少女はまるで変質者でも見るような目で俺を見ている。

「この変質者が」

…いや、変質者として俺を見ていたようだ。ちよつとあんた。そり
ゃあんまりにもヒドくない？

本日二度目の変質者扱いにショックを受けつつも、これ以上変質者
扱いされてはたまらんと、俺は急いで弁解に回った。

「違う！俺は変質者じゃない！」

「変質者は誰しもそう言うんだ」

はい、墓穴。もう何を言っても俺は変質者確定らしい。

…そうかい、そうかい。そういうことならこっちにも考えがあるん
だからね！

あまりの理不尽さに、もはや崩壊した俺のリミッター…

「ふっふっふっ…バレちゃあしょうがない！そうさ！俺は生粋の変
質者！悪戯されなくなったら大人しくこの家を明け渡し、この場
からそうそうに立ち去るがいい！」

気がつけば俺は住宅街の一角で声高らかに変質者宣言をかましてい

た。

第五幕 「キモい」より「気持ち悪い」の方が男としては傷つきます（後書き）

作者は1cmの長さがよくわからなかったため、今更ながら小人の身長が30cmほど縮みました。150で結構でかいわ（^^;）さらに縮むかも・・・

第六幕 楽園ってのは意外に近くにあるのかも知れない

「ふっふっふっ…バレちゃあしょうがない！そうさ！俺は生粋の変質者！悪戯されたくなかったら大人しくこの家を明け渡し、この場からそうそうに立ち去るがいい！」

俺のそんな突拍子もない発言に、彼女の顔は見る見るうちに青ざめていく。人がドン引きした瞬間というものを、俺はこの時初めて目の当たりにした。

「よ…寄るな変態！」

さっきまで気丈な態度をとっていた少女は、一転して慌てふためいている。

そこで俺は思ったね。

あれ？これイケンジャネ？と。

血迷ったことを言ってしまったと思ったが、このまま脅しをかけていけば彼女は逃げ出し、とりあえず土地だけは取り返せるかもしれないぞ？…と。

しかし彼女を追い払っても、この扉が開かない以上、この土地の奪還などあり得ないわけで、その考え自体がすでに血迷っているわけだが、どうにもこうにもその時はそんな期待が先行して俺は間違いに気がつかないまま、その変態トークによる畳みかけに入ってしまった。

「ぐっへっへっ、お嬢さんの柔肌をタッチング！そして俺はヒーティング！」

言い逃れようのない変態の出来上がりである…。

「……………」

そんな俺に、もはや言葉もでないような彼女。彼女は俯き、腕を震わせている。

その様子に

「あらあら、泣いちゃった？ちよいとやりすぎたかしらホホホホ」
何て罪悪感を感じていると、

ピンピコリ〜ン

変な効果音とともにどこからともなくあの巨大ハンマーが出現した。あれ？どこから出したんですか、そのハンマー？そしてあなたは何故それを大きく振りかぶって…

「死にさらせ…！」

その言葉と同時に、彼女はその巨大ハンマーを恐ろしいスピードで俺目掛けて振り下ろした。

「へ？」

その速さは体育の成績3（五段階評価）という平々凡々な俺の運動能力では到底かわし切れるものではなく、しかもそんなスピードで巨大なハンマーが振り下ろされるのだから当たれば即死確実。

やばっ…

今更ながら生命の危機を感じ取った俺だったが、時すでに遅し。ハンマーはあつと言う間もなく距離をつめると、俺の視界をその身で覆い尽くした。

そこには目を背ける隙はおろか、死を覚悟する余裕すらもない。あるのは一瞬の恐怖と一生分の後悔のみ…

あー！あんな発言しなきゃよかったあ！ぎゃあああ！マジで死ぬう！

死神の鎌ならぬ少女のハンマーは直撃まで後ほんの数センチという

ところまで俺に迫り

「止めてリダ!!」

ピタリと、その動きを止めた。

「あ…あ…?」

よくわからないが…助かった?

そうわかった瞬間、体中から汗がドツと噴き出し、俺は膝から崩れ落ちた。

どうやら恐怖がやっと体にも伝染したらしい。

マ、マジで本当に恐かった!生きてて良かったよー!

「姫…止めるな。こんな変態は死んだ方が世のためだ」

俺がそんな風に生きていることを実感している中、もはや俺のことなど見もしないで少女は俺を隔てた誰かと話している。

そっぴや誰かの叫び声が聞こえたような気がする…やめてとかなんとか。ありがてえ、どなたか存じ上げませんがあんたは命の恩人ですよ!

俺は少女の視線の先にいる救い主にどうにか御礼を言いたくて立ち上がろうと体を動かした。

しかし、恐怖で縮こまった体は思うように稼働してくれず、

「あ、あら?」

俺はバランスを崩し、ステンと背中から転げ、仰向けに倒れた込んでしまった。

「え？」

結果。俺は寝転んだ状態で、その恩人と対面したわけだが…どうにもこのアングルは、礼を尽くすこの状況には適さないようで…

「っ……………！」

彼女の顔はあっという間に真っ赤になり、そしてみるみるうちに憤怒の表情へと移行する。あーあ、結局このパターンかい。

俺は次にくる展開を見越し、もうどうせならもつと見てやろうと首を亀のように持ちあげて、天井の楽園を凝視した。しかしそれがいけなかったのか、

「こ、この変態！」

がすん！

彼女に思い切り顔面を踏まれたことにより、俺は頭を打ちつけてしまい、俺の意識はまたすっ飛ばされることとなった。

いや、もう死んでも悔いなしですけどね。なんてことを思ってる俺ってやっぱり変態なのかと考えてしまう十五の朝方のお話…。

第七幕 腐っても親は親。皆さん、親孝行をしましょう

俺が幼い頃、仕事の関係で海外を飛び回ることが多かった親父は、家に帰るのも年に二三度とかいうペースであり、当時の俺といえばそんな根無し草な親父がいつ帰るのかと待ち望みながらもキャッチボールをする親子を羨望の眼差しで見えていたり、なかなか可哀想な幼少期を送っていた。

しかしうちに帰れば、明るく破天荒な母が笑顔で俺を迎えてくれたし、月に一度とはいえ帰ってきた親父は俺との時間を第一に考えて遊んでくれた。

なので決して寂しいということではなく、寧ろ幸せな家庭だと思っていたくらいだ。

絆の深い家族だと思っていた。自慢できる家族だと思っていた。その頃俺はそう信じてたのだ。

しかし、そんなものは俺が中学の卒業式を終えた翌日に泡となり消えた。

「あのね、パパとママは離婚することになったの」

親父の帰国と俺の卒業祝いを兼ねてどこぞのレストランで食事をとっていた最中、突如として我が母はいつもは見せないような至極真面目な表情で、そんなことをのたまったのだった。

「は？」

その発言に対し、俺は口に運ぼうとした料理をポロリと落として、

思わず間拔けな声をあげてしまった。

母上様、今なんとおっしゃいマシタカ？確か離婚がどうか…いやいや、ありえねえっしょ？いくら春とはいえ今はまだ3月ですぜ。エイプリルフルはまだ先だよ、このオツチヨコチヨイめ！

「嘘でも言っていていいことと悪いことがあるぞ。第一今日は祝の席なんだから、そんな不謹慎な冗談はよしてくれよ」

俺はなるべく平静を装って、そう返答してやった。

すると母は急にニカツといったもの笑顔で

「ごめんごめん」何て言うもんだ。

俺は内心ホツとしながらも

「勘弁してくれよ」とヤレヤレなジェスチャーをして、食事を再開しようとフォークを握り…

「嘘でも冗談でもないの」

今度はそのフォークを皿の上にカッシャーと落としてしまった。

その音に他の客たちは何事かと一瞬俺たちの方を見るが、すぐに視線を自分たちのテーブルへと戻し、また食事に、談笑に花を咲かせる。

みんな楽しそうな笑顔で笑っている。例外は俺たちのいるテーブルのみ…てかさっきの笑顔は何だったんだよ！

「いや、私らしくないかなと思って」

んなもん知らねえよ！

マジでキレちゃいそうな俺は、どうにか落ち着こうとグラスに入った水を一気に飲み干した。まあ、こんなことで落ち着けるほど大人じゃありませんけどね！ばかあ！

空いたグラスを乱暴に置くと、俺はキツと母を睨みつけた。決して憎しみを視線にこめているわけではない。説明を求めているのだ。「ちゃんと説明しろ」と。そのサインなのだ、これは。

母はそのサインをどうやら読み取ったらしく、また真面目な顔をして話し始めた。

「実はね、私。好きな人ができちゃったの。その人は私の中学校の時の同級生でね。少し前に同窓会があったんだけど、その時再会してね。でもまだその時は別に懐かしいな、ってそんな気持ちだけだったんだけど。何度か会ううちに惹かれあったっていうの？お互い好きになっちゃってて。つい先日彼の方からプロポーズされちゃったの。」

「僕のパンツを洗ってくれ」とかなんとか…。正直それはどうよと思う反面、凄くときめいている私がいて。でもね、私は「二人ともいい年だし家庭もあるから駄目よ、こんなの」ってね、言っただけど、そう断っただけだね私は。彼ったら

「僕はバツイチ子持ちだから全然O・K・！」何て言うもんだから、私またクラツときちゃって…」

…なぜそんなに捲くし立てるように喋るのか、母よ？何はともあれ、衝撃的事実発覚ですよ皆さん。

「つまり浮気してたってことか？」

「…うん、そう…」

うん、そう…っじゃねえよ！いい年扱いて何考えてんだお前は！

状況をようやく理解した俺の怒りはフルスロットルに。俺は母を叱咤し、罵るためにテーブルへと身を乗り出した。

「止めなさい」

しかしそんな俺を横から手で制する親父。親父は首を二三度横に振ると俺を席に座らせようと肩に手をおいた。

「何でそんなに冷静でいられるんだよ！」

「親父は裏切られたんだぞ！」等々、言いたいことは色々あったが、止めた…。

どんなに冷静であろうが一番傷ついているのは親父のハズだ。その親父がやめろと言った。これ以上母さんを責めるな、と…。ならもう俺がとやかく言うことでもない気がしたのだ。

俺は大人しく席につくと親父に視線を送った。親父はそんな俺の様子に力なく笑みを浮かべる。

「私は大丈夫だ」と俺を安心させるかのように…

この時俺は心に誓ったのだ。どんな事があっても俺は親父を裏切らないと。いつ帰ってきてても俺だけはこの人を迎え入れてやろうと…

そう誓ったはずだった。

しかし俺はこの後、たった今たてたはずのこの誓いをものの数十秒で撤回する事となる。

「まあ、それはさて置き…実は今日はお前に会わせたい人がいるんだ」

「は？」

いきなりのその発言とほぼ同時に、どこから出てきたのか謎の女性が俺たちの前に現れた。

「シャツチョーサーン！マチクタビレタヨー！」

片言な日本語。顔立ちも日本のそれとは違う。アジアンテイストな美女が親父の首に腕を回して抱きついてきた。

そんな彼女を親父は

「おいおい、こんな所でよさないか」何てなだめつつも満更でもない御様子で…えーと、つまりコレって…？」

「紹介しよう。彼女の名はアイリン。見ての通りフィリピン人だ。彼女との馴れ初めはそう…一年前のある雨のことで…」

…………正直呆れてものも言えない状態だが、あえてつつこましてもらおう…。

お前も浮気してたんかあい！

そこで、俺は目を覚ました。

第八幕 ピンクといえどもっばらいやらしいイメージ

悪夢とは1.「二度と見たくないような嫌な夢の類」を指すものと、
2.「夢でしか起こり得ないような恐ろしい現実」を指すものの二種類がある。

詰まるところ言えば、さっきのはただの夢オチというものではなく、俺の実体験がそのまま夢として映し出されたものだったわけだから、両方の意味を兼ね備えた悪夢ということになる。…でもまあしかし、そんなどうでもいい事実に喜ぶのは「夢だけど夢じゃなかった!」とはしゃぐ少女達くらいのもんであり、ごく一般的ピーポーは「あつそ」とか「それで?」とか冷たい反応で話を切るか話を急かすわけです。

なんてまあ、そんなくだらない前置きはさて置いて…。

結局あの後、俺の両親は俺の目の前で離婚届けに判を押し合い、清々しいほどにさっぱりと離婚を成立させたのだった。

そして俺はといえば、何故か根無し草な父親に引き取られることがすでに決定しており、

「この場合普通母親じゃね?」と反論しようとも思ったが、よくよく考えてみれば再婚相手の家で、しかもこぶつきのアットホームで生活するよりは独りでこの家に残る方が何倍もマシなように思え、結局それを黙認した。

それが一年前の話だ。

今では一人暮らしもすっかり板に付き、それなりに日々の生活を満

喫していたわけなのだが、皆さんもご存じの通り俺の受難はそれだけに留まらず、それどころか更なる悪夢にうなされることになった次第である。

そして周りを見るに、どうやらその悪夢は未だ覚めてはいないよう
で、真つ赤な絨毯にピンク色の壁という、このファンシーの意味を
履き違えたような部屋に俺が寝かされていたことが、それを如実に
物語っていた。

だから「ここはどこだ？」…などとは言わない。あのキノコハウス
の中だろうことは、想像するまでもなくわかることだから。

気を失った俺を見かねて今度はきちんとした場所に運んでくれたの
だろう。

当然俺を殺しかけたチビツコではなく、多分おそらくだが…あの子
が。

俺を助けてくれた姫と呼ばれた少女。あのアングルからでは顔はよ
くわからなかったが、すらりとのびた手足は雪のように白く、長く
切りそろえられた黒髪は絹のように滑らかで、それだけ見て俺は彼
女が相当な美人だろうことを勝手に確信した。さらに言えば、俺は
そんな特徴を持ち合わせた人物に1人だけ心当たりがあったわけだ
が…。

「はっ、まっさか…」

よっこらせーと体を起こした俺は、自嘲気味な笑いを漏らし、その
考えを一蹴した。

ないないない。それはないって。何だってあの人がこんな所に…

「ん？」

そして今更ながら気が付いた。自分の股間あたりで何かが蠢くのを…

「すぴー、すぶうー」

「……………」

そこにいたのはこれまた少女だった。全体的にピンク色した少女が何故か俺の股の上で猫のように丸くなりスヤスヤ寝息をたて眠っていた。

とりあえず俺はその子のことをピンクちゃんと命名することにした。ピンクちゃん！あんた一体何やってんの！？

第九幕 小学生は大概ジャンケンで何でも決める

前回までのあらすじ

起きて早々に前々回の夢の解説に入る俺は良く出来た主人公だと思
った。そんなこんなでピンクの幼女が俺の股ぐらに…！？

P S ・第八幕の題名に共感をもった人はもっと広い視野で世界を見
た方がいいと思うよ！

今俺の股の上でスヤスヤ寝息をたてて眠る少女は、その名をピンク
ちゃん（俺命名）という。

服装もピンク色。ふわふわと綿菓子のような髪もピンク色。だから
ピンクちゃん。

そんなピンクちゃんはさっきからまったく起きる様子もなく、未だ
俺の股の上で眠りこけている。

一見何とも微笑ましい光景のように見えなくもないが、俺はそんな
ピンクちゃんをじっと見つめ、ゴクリと息をのんだ。

決して

「ゲヘヘ、ピンクちゃん可愛いぜえ」などといかがわしい事を考え
ているわけではない。

俺はこの少女に恐怖しているのだ。

なぜならこの少女の出で立ち、どこか見覚えがあるものだったか
ら。

桃色のチュニツクに黒のパンツ、やけに先のとんがったブーツ、そ
してヘンテコな布製の帽子…。色こそ違えど、その服装はあのリダ
という少女とまるっきり同じものであり、つまりそこから導かれる

答えはたった一つで…

《ピンクちゃんはあの赤豆太郎の仲間！》

答え合わせをするまでもなく、そういう結論に達することができる。まあ、この家に乗っ取られたことを考えれば服装など見ずとも彼女が俺の家の仇であることは至極当然にわかることだが。とにかく俺をぺしゃんこにしようとした少女の仲間が俺の股の上で寝息を立てているというこの状況は俺にとって恐怖以外の何物でもない。

「もうマジ帰りてえ…」

帰る家はここだというのに、そんなことすらすでに忘れて俺は早くも戦意喪失。しっぱまいて逃げる気満々だったわけだが、どうにもこのピンクちゃんが俺を抱き枕よろしく布団共々抱きしめているせいで身動きがとれない状態である。

怖いからなるべく起こしたくはないのだが・・・ここで彼女を引剥がそうと手を出せば、きっとまたしても俺は変態扱いをうけるに違いないことは先の経験でおおよそ予想できることで、どうせ赤豆太郎があのだアを突き破って「寝込み襲うなんて人の風上にもおけないな！このど変態が！」などのたまい、またあのハンマーで殴りかかるわけですよ。わかってるんですよ！パターン読めてんですよ！

しかし、だからと言ってこのまま手をこまねいているわけにもいかず、どうしたもんかと考えていた俺はふと閃いた。つまりは彼女に触れなければいいのだ。なら…

思い立ったが即行動と俺は掛けてある布団を手にとった。そして手間取りながらもその掛け布団をピンクちゃんを中心として端からたたみこみ、その端と端をしっかりと結んだ。

「よし！」

俺はしてやったりの顔で俺の股の上のピンクちゃんののりの果てを上から眺めた。

目の前には大きな包みが一つ。無論これは布団に包まれたピンクちゃんである。これならばピンクちゃんに直接触れることなく彼女を排除する事ができ、尚且つ万が一にも破廉恥な行いをしているようにも見えない。あれ？俺天才じゃね？

「てかこんなになってもまだ寝てるって…どんだけー」

俺はそんなピンクちゃんに少し呆れながらも目的を果たすため袋の結び目を両手でつかみ、持ち上げようと腕に力を込めた。

しかしこの体勢で、しかも子供とはいえ人一人を持ち上げるというのは相当に筋力を使うもので、さらに言えば袋にされた（包まれた的な意味で）にも関わらずピンクちゃんは未だ俺の股にがっしりとしがみついているため、結局のところさっきから少しも動いていないというのが現実で…

「無理」

そう早々に悟った俺は袋から手を離し、誰に見せるわけでもなくアメリカンコメディさながらにお手上げのポーズ。

ふふっ、非力な俺を笑いたければ笑うがいいさ…。でもね、結果よりその過程にこそ意味があると僕は思うよ！

一体どの過程にどのような意味があったのか定かではないが、とに

かくやれるだけのことはやったと俺は半ば投げやりにもまたベットに寝転がった。

「何やってんだお前は…」

「どうわっ!？」

しかしそれも束の間。言い訳全開フルスロットルの俺は、目の前にまたしても現れたあの赤い悪魔の再来にびっくりドッキリ飛び起きて、ついでに口も滑らした。

「あ、赤豆太郎…!？いつの間に!？」

「…お前相当死にたいらしいな？」

レッドデビルは邪悪な笑みを浮かべ、五本の指を堅く握りしめた。何？ジャンケンでもしようっての？そうでしょ？そうだよな？それじゃ、じゃーんけーんばげぶう！

俺は手をパーで突き出しながら赤豆太郎にグーで顔面を殴られた。でもジャンケンには勝ったよ！試合に負けて勝負に勝った！ん？逆か？ま、いいや！誰か褒めて！てか痛えええ！

殴られた頬をおさえ、ベットの上で悶え苦しむ俺。それをまるで汚物でも見るような目で見ながら赤豆太郎はため息をつく。そして如何にもめんどくさそうに、俺に向かってこう言った。

「来い変態、姫がお呼びだ」

第九幕 小学生は大概ジャンケンで何でも決める（後書き）

評価が一向につかないもんで「ハイハイ、どうせ誰も読んでないんですよ……」何ていじけていたら今回評価を頂いて作者は大変喜んでおります。いや、ホントに。他にもこんな作品を「はんつ」と鼻で笑って見てくれる人がいれば嬉しいです。え？オチ？ありませんよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8913d/>

七人の小人少女

2010年10月9日11時14分発行